

大学生になりたいなら、評論を読みなさい！

下流志向～学ばない子どもたち 働かない若者たち

内田 樹／〔著〕

講談社文庫

なぜ日本の子どもたちは勉強を、若者は仕事をしなくなったのか。だれもが目を背けたいこの事実を、真っ向から受け止めて、鮮やかに解き明かす怪書。

「自己決定論」はどこが間違いなのか？「格差」の正体とは何か？目からウロコの教育論、ついに文庫化。「勉強って何に役立つの？」とはもう言わせない。

☆内田 樹：東京大学文学部仏文科卒
神戸女子学院大学名誉教授

☆他の著書：「街場のアメリカ論」「街場のメディア論」
「街場の憂国論」など“街場”シリーズが評判



< 目 次 >

第1章 学びからの逃走

（新しいタイプの日本人の出現／勉強を嫌悪する日本の子ども／学力低下は自覚されない／「矛盾」と書けない大学生／わからないことがあっても気にならない ほか）

第2章 リスク社会の弱者たち

（パイプラインの亀裂／階層ごとにリスクの濃淡がある／勉強しなくても自信たっぷり／自己決定する弱者たち／学力低下は「努力の成果」 ほか）

第3章 労働からの逃走

（自己決定の詐術／不条理に気づかない／日本型ニート／青い鳥症候群／転職を繰り返す思考パターン ほか）

第4章 質疑応答

（アメリカン・モデルの終焉／子どもの成長を待てない親／相手の話を聴かない人々 ほか）

昔は、評論文読解といえど「先ずは『小林秀雄』を読みましょう」が定石でした。しかし、小林秀雄さんはお亡くなりになって久しいので、最近あまり名前を聞かなくなりました。

そこで、新しい評論の書き手は誰だ？受験に出題されている作家は誰だ？と調べてみました。最近の国語の教科書に載っているのは、**村上陽一郎、鷲田清一、内田樹**さんが多いようです。当然入試問題でも出題される可能性が高くなりますね。

この本は、講演会での話を文字に起こし、そこから余分なところはそぎ落とし、資料説明や論拠などが不足、不明瞭であったところを加筆訂正されて出版されたものです。ですから、評論文といっても堅苦しく、難解な文章ではありません。常体と敬体が入り交じり、文語調と口語調が入り交じった文章です（本来の評論文としては拙いですけどね）。評論の入門編としては読み応えのある内容、テーマだと思います。

大学入試の国語の試験では必ず評論が出題されます。小論文試験も、課題文とし提示されるのは評論です。つまり評論文を読みこなせないと、大学生にはなれないのです。さらに、大学で教科書として用いられる書籍は、その大半が論文であり、試験は論文であるのが一般的です（ただ、最近の大学生は学力低下が著しいので、教科書も試験もレベルが下がっているかもしれませんが…）。ゆえに「**まっとうな大学生になりたいなら評論を読みなさい**」となるのです。

本書では、『学びからの逃走』『労働からの逃走』が個性の発現、生き方の自由だと考える人が増えていることへの警鐘が語られています。また、「わからないことを、わからないまま」にしても全く不快さや不安さを感じないから、子どもたち（大人も）は、学ばなくなったと主張しています。子どもの学力低下やニートやフリーターの増加など、日本社会が抱えている問題を論じています。進学希望者には（もちろんそれ以外の人にも）ぜひ読んでもらいたい本です。

就職試験結果速報！

朗報が続々届いています！

9月29日現在で、**82名が入社内定**をいただきました。好調だった昨年は9月末までに28名が内定していましたので、今年がいかに凄いかかわかるとおもいます。

第一陣として就職試験に挑んだ生徒は126名。結果待ちの人やこれから試験がある人もいます。来週中には、ほぼ全員の結果が出そろうのではないかと思います。さらに良い結果が続くことを願っています。

一方で、残念な結果に終わった人もいます。なかなか気持ちを切り替えることはできないかもしれませんが、「あなたのような人を求めています」と言ってくれる企業が必ずありますから、受験した企業とは「縁がなかった」と考えて、「**ご縁がある**」企業を探しましょう。ただし、**自己分析はしっかりやりましょう**。今回受験した企業、職種に自分の適性があったのか検証することは大事です。一回目の企業選択は、おそらく希望優先で受験をしたはずです。次回は適性を重視してください。自分の優位性を重視してください。「自分に向いている」という**思い込み**や“とにかくこの仕事をしたい”という**願望だけでは、良い結果は出ません**。

今年度は昨年を上回る数の求人をいただいています。世の中はどこも人手不足です。働く人がいないために倒産する会社も出始めているようですから、「ブラック企業」というレッテルを貼られないように、採用した社員が早期退職しないように大事に育てているようですが…。

先月発表されたデータでは、北海道の有効求人倍率は1.26倍だそうです（この場合の倍率は数字が高いほど求人数が多いことを表します。1.26倍ということは、一人にあたり1.26社の求人があるということです）

ただ、業界や職種によって偏りがあります。**飲食サービスは2.7倍、販売は1.5倍**と求人数が多いのですが、**一般事務は0.26倍、経理事務は0.65倍**という数字になっています。0.26倍ということは、事務職希望者は、4人に1人しか就職できないということです。東商生が望む職種は依然として競争があるようですね。そのような状況でも、82名中47名が事務的な職業に就いていますから、やはり東商業は凄いのです。内定した3年生の努力も讃えられるべきものですね。

